

石垣栄太郎と『紐育新報』

——文芸活動に見る創作の転機——

佐藤 麻衣

はじめに

戦前のアメリカで創作活動をした日本人画家については、近年渡米画家をテーマにした展覧会などにより、⁽¹⁾彼らの活動は明らかにされつつある。また、二〇一五年にスミソニアン・アメリカン・アート・ミュージアムで開催された国吉康雄の回顧展は、⁽²⁾二十世紀のアメリカの画家として彼の功績を再評価するものとなった。このように、アメリカに渡った日本人画家の活動が注目されてきている中で、本稿では、国吉康雄と同時期にニューヨークで美術活動をした、石垣栄太郎（一八九三年—一九五八年）の文芸作品を取り上げる。

石垣栄太郎は、父親の呼び寄せで、一九〇九年に和歌山県太地から、カリフォルニアに出稼ぎのために渡っ

た。そして、英詩人、管野衣川の夫人で、彫刻家のガートルード・ボイルと出会い、彼女の勧めで、サンフランシスコの美術学校で学んでいる。この後、石垣栄太郎とガートルードは恋愛関係に発展し、一九一五年には彼女とのスキヤンダルがもとで、西海岸の移民地を追われるようにして、ニューヨークに移動している。画家としての石垣栄太郎は、一九二五年の独立美術家協会展に出品した、《鞭を打つ人 (The Man With the Whip)》が評価され、以後、アメリカの美術界で創作活動をしていたことが、明らかにになっている。⁽³⁾だが、これ以前の美術作品は、《女の顔》（一九一六年）と、⁽⁴⁾《自画像》（一九一七年）があるものの、このほかに作品の所在が確認できないことから、一九一〇年代の創作活動は、不明な点が多い。

この時期の石垣栄太郎の創作活動を解明するために、

筆者はこれまで、アメリカで発行された、日本語新聞を調査してきた。すると、サンフランシスコの『新世界』に小説「その夜」が、⁽⁵⁾ニューヨークの『日米週報』に小説「除夜の鐘」、⁽⁶⁾『紐育新報』に小説「髑髏に接吻する女」⁽⁷⁾が、掲載されていることが明らかになった。そして、これらの作品は、当時石垣栄太郎が傾倒した、オスカー・ワイルドやダヌンチオの世紀末芸術の影響を受けた、頹廢的な作風だったことも判明した。⁽⁸⁾また、このほかに、『紐育新報』には、石垣栄太郎の美術批評も掲載されている。なかでも注目すべきは、一九二二年の画彫会の展覧会の批評だ。⁽⁹⁾ここでは、同展に出品した『死の勝利』について、これは「五六年前の作品だ。私がワイルドのデカダン哲学の感化を受けボードレー^マの悪魔主義に感染していた時分の作品なので、其後思想に激変を来して居る今の自分から見て余程遠縁のものだ。今度の展覧会が玉石同架のショーであるとすれば自分のものは確かに石の最も粗悪なものであるに違ひない」と述べている。⁽¹⁰⁾『死の勝利』は所在の確認ができないため、構図は不明だが、この批評からは、世紀末文芸の影響を受けた作風だったことが窺える。ところが、一九二五年の独立美術家協会展に出品した『鞭を打つ人』は、⁽¹¹⁾煙を吐き出

す煙突と街を背景に、馬を鞭うつ人物を描いた作品で、⁽¹²⁾これ以後、同展に発表された彼の作品は、社会の風俗を写實的に描いたものへと変化している。このことから、『女の肖像』や『自画像』、『死の勝利』を制作した一九一七年頃から、独立美術家協会展に作品を出品し始める、一九二五年までの間に、石垣栄太郎の創作活動には、「思想の激変」とされる転機があった。

そこで本稿は、一九一〇年代の『紐育新報』に掲載された、彼の文芸作品を手掛かりにして、後の創作活動に影響を与えた、思想の転機を検討する。

一、『紐育新報』の小品

一九一五年に、カリフォルニアからニューヨークに來た石垣栄太郎は、茂木商会で美術工芸品の修理や傘の柄を作る仕事などをして生計を立てていた。当時の様子は、「アメリカ放浪四十年」や、⁽¹³⁾小説「除夜の鐘」に表れている。⁽¹⁴⁾また、一九一七年に、前田河広一郎らと発行した文芸雑誌『共存』には、「出獄の前夜」という詩を発表している。⁽¹⁵⁾だがこれだけではなく、『紐育新報』にも文芸作品を発表している。そこで、一九一七年七月に

発表された、小品「野に叫ぶ人の声を」を取り上げる。

沈滞した恋の悩しい空気が、もの憂く私の薄暗い室をとじ込めている、赤く腐爛した惨ましい肉慾の臭い、死の影に漂ふている頹廢の気分が、暗く暗く我が若き日の生活の河に漲っている。私の頭は重き灰色の雲に閉され、身体は綿の如くに疲れ、恐しい病熱にでも冒された時のやうに凡べての関節が弛るみ動き難きまでに痛み出した。私は悪夢に魘されているやうな落ちつきのない気分で震へ戦慄しながら罪の寢床に横っている。と、小さな好奇心の窓が開いて微かな光が、恰度、冬の夜明けがた牢獄に苦しむ囚人の甕れた頬に訪れる時のやうな蒼白い光りが、私の暗い生活の室に流れ込んで来た。

冒頭では、暗い部屋を背景に、恋の悩ましい、物憂い空気に満ちた、作者と思しき語り手の、死の影が漂うような、頹廢的な気分が語られている。この背景には、作者が、カリフォルニアからニューヨークに來た事情があるだろう。石垣栄太郎は、ウォーキン・ミラーの山荘で出会った、菅野衣川の夫人で、彫刻家のガートルード・

ド・ボイルとのスキャンダルの末、一九一五年に彼女と共にニューヨークに來たのだが、当時、ガートルードは菅野衣川との離婚が成立しておらず、離婚訴訟の途中だった。また、彼らの後を追うようにして、菅野衣川もニューヨークに來ていた。このような背景を踏まえると、落ち着きなく、悪夢にうなされているやうな気分で、震え慄きながら罪の床に横たわる語り手の様子は、ガートルードとニューヨークに來たことに対する罪の意識と、菅野衣川との再会を恐れる、石垣栄太郎の心情を読んだものだと考えられる。

そして、この後、語り手は教会で伝道師の話を聞くが、不安は消えることなく、再び暗い部屋に戻る。末尾では、その様子を次のように語る。

私の暗い室は運命の浪間に漂ひつつ流れてゆく、時は広大無辺の未来に流れ、神秘の雲間に消へて行く。(略) 宿命の糸の靈妙な力は人間の単細胞時代から類人猿の時代に生息していたといふ幾百万年もの過去から、神々の時代に進化するかも知れぬ人間の未来にまでも、纏れつ離れつ、人と人との怪しい縁を男と女との不思議な接触を司っている。我が若

き日の生活を彩る宿命の糸の鮮かさ。好奇心の小さき窓からさす微かな光の不思議さ。大凡俗ビリーと私との間にはただほんの一瞬間の糸の綻れがあるばかりだ、私は再び暗い暗いものとの室に帰って罪の寢床に横っている。(六月三日)〔野に叫ぶ人の声を〕⁽⁶⁾

「宿命の糸の靈妙な力」によって、綻れながら結ばれた人と人との怪しい縁には、ガートルードと管野衣川と、自身との間で綻れた、人間関係を表しているのだろう。暗く頹廢的な作者の心情は、再び罪の寢床に横たわる末尾にも表れている。

また、これと同時期の小品に「滅亡の門辺に」がある。ここでは、作者の分身と思しき画家が、肺病を煩って日本に帰国した友人の手紙を語る。

重い悲愁と懊悩とに曇った、灰色の空は、黒い夜の衣を纏った、死の表徴のやうに、蒸し暑い夏の日の午后を、暗く暗く包んで居て、燈火を点けねば仕事を為得ぬほど、その色を濃く漂はせて居た。

重苦しく、垂れ込めるような曇天には、語り手の悲愁

と、悩みもだえる心情が投影されている。そして、夕立と雷鳴が鳴り響く夏の夕方に、長い間音信不通になっていた友人の手紙を読む。作者のもう一人の分身である友人は、次のように書き送っている。

自分は近いうちには、どうしても死なねばならぬやうな気がしてならぬ。然し自分は死にたくはない。自分にはまだまだだなさねばならぬ仕事が残っている。だが…、ああ、死、死が来るべき私の運命なのか。(略) 死、死は今の私の病苦から、のがれる唯一の道であるかも知れませんが、然し、自分には、死と云ふことを思ふと、ぞつとする。私は死にたくはない、どこまでも生きられるだけ生きて居たい。だが、一度受けた死の宣告…、いつそ死ぬのなら日本へ帰って、日本の風に吹かれて死にたい、横浜の棧橋の上で、紅い血を吐いて死んでも私はそれで満足だ…、此の頃私はこんなことを考へてならぬ。それで七月十二日桑港発の日本丸で帰国する。

友人がアメリカに來た理由は明らかにされていないが、石垣栄太郎も含め、当時アメリカに渡った日本人の

多くが、出稼ぎ目的の移民だったことから、この友人も出稼ぎ労働者としてアメリカに來たのだろう。しかし、不治の病に侵され、死を予期した友人は、志半ばで日本に帰国する。ここで作者は、異郷に暮らす自身の苦悩を、病に苦しむ友人として表したのだろう。彼の手紙には、果たし得ない夢を残して帰国する無念さと、郷愁が綴られている。手紙を読み終えた語り手は、友人の帰国の途を思い、次のように語る。

永い間の病苦で瘦せ衰へた彼が、まだ二十を少し過ぎたばかりの身を、薄暗い三等室に横へて、懐かしい故郷に残って居る一人の母を慕って、長い航海を続けて居る、その哀れな心根を思つて、私は泣かざるを得なかった。生者必滅会者定離、自然の理法は悲しい、闇浮堤に吹く諸行無常の風荒れて、我が友は死を覚悟して日本へ帰へた。(略) 嗚呼人は人類的に滅亡の門辺へと近づいて居る。人間は皆肺病患者だ、滅亡への門辺に、正義があらうか、人道があらうか、自由があらうか……。夕靄にとざされた第十四街の小さな私のアトリエは悲愁の闇に漂って居る。友の手紙を持った私の手は、限りなき悲しみ

に漂って居る。彼は今どうして居るだらう（七月二十三日）（「滅亡の門辺に」）¹⁷

語り手は、死を覚悟して帰国する友人の身の上を思い、「生者必滅会者常離」と、この世の無常觀に重ねて、悲しみに漂っている。人類が向かつて居る、「滅亡の門辺」は、荒れすさんだ滅亡の世界への入口として描かれており、これと同様の「門」が、小説「鬍髯に接吻する女」にもある。それは、主人公、川島庸一の想像の世界にある「秘密の扉」で、「靈魂の頽廢を早めた人間的な生活の光輝を語る、化学文明の勝利を謳ふ、奏樂の音波が流れ」る、享樂に満ちた頽廢的な世界と、彼が住む現實の世界を隔てるものだ。扉の向こう側には、「亡国の哀歌をうたひながら、亡びゆく人の世を悲しみながら、死んでゆく年若い詩人」がいる、頽廢に満ちた世界が広がっている。だが彼は、この門を通り、享樂の世界に行くことはできず、「あの門の外で死なねばならぬ運命の圧迫に脅へて居る」。¹⁸川島庸一の前にある「秘密の扉」と同様に、「滅亡の門辺に」の「滅亡の門」は、頽廢的な世界の入口として描かれている。

二、新報詩壇

石垣栄太郎は、一九一八年の『紐育新報』に、小品「エ
イの手紙」⁽¹⁹⁾、オスカー・ワイルドの「審判の庭」の翻訳、⁽²⁰⁾
詩「祈り」⁽²¹⁾、トルストイの「生ける屍」の劇評の合計
四編を発表している。⁽²²⁾ また、一九一八年の年の秋から、
紐育新報の活字工として、日本語新聞の制作にも携わ
り、一九一九年には、新報詩壇に「坩堝」というペン
ネームで詩を発表している。では、新報詩壇に発表され
た詩、「ある連続せる感覚」を取り上げてみよう。

不安は、
どんよりと
曇る空より
魔の如く黒き、
翼を拡げて
われに来る、
胸に、おもき、
鉛をやどせる。

青き糸の

もつれつ、立ちのぼる、
煙草。

どす黒き、灰色の
吐きだされ、
舌と、のんどを
焼きつくせど
鉛はとけず。

音なく、赤かく
性慾は、
もへてつきず。
灰は、死して、
落つ。
黒く、かろく。

紅き色に、ふるる勿れ、
黒き色を、見る勿れ
きちがひの如く
錯覚は、荒れくるふ
われに、色を見せる勿れ。
（「ある連続せる感覚」⁽²³⁾）

この詩には、連続する不安な感覚が詠まれている。一連では、どんよりと曇った空に、作者の不安な気持ちを投影している。その不安は、胸に重苦しく、鉛のように宿っている。鉛に例えられた不安を二連では、煙草の熱でも溶けないものとして表現している。そして三連では、不安の要因でもある、赤く燃える性慾は、燃え尽きることなく、黒い灰となる。終始消えることのない不安な気持ちは、黒と赤の色彩に表され、四連では荒れ狂う錯覚となる。不安で陰鬱な様子がここでは基調となっている。

これと同時期の作品に、次のような詩がある。

暗き窓、

眠りて墓場の如し、

星かすかに見へつ、

どんよりと空に、

月かかりぬ。

血のごとく生臭き月なり、

金色の傘をもつ。

夕闇はしづかに、

ゆれ、

われ、何んとなく寂し、
ただ悲しき夕べなり。

ああ都市は、

寂し。

〔哀傷の夕〕⁽²⁴⁾

「哀傷の夕」には、暗い窓辺から見える、夕闇に包まれた寂しい暮れ方の街の情景が読まれている。静寂と闇の中で光りあるものは、かすかな星の輝きと、曇った空に架かる、血のように生臭い月だけだ。人気もなく寂しい都会の光景からは、作者のものの悲しい心情を窺うことができる。

このような暗く哀傷を帯びた詩に続いて、「死の誘惑」が発表される。

自省なく、

自責なく、

自戒なき、

吾れ、

何んの故に

生きんとはするぞ。

腐れたる、一塊の肉のごとく、
みにくき、耻しらずの
吾れ、
何んの故に、
神は、
この生を許し給ふや。
ああ、

われ、苦しきかな。

悲しきかな、

寂しきかな、

目的なく、光なき、

生命を抱ける、吾れ。

ああ苦るし、

死は唯一の隠家なれど、

吾れ、

死を恐るること甚だし。

神秘は恐怖なれば。

(「死の誘惑」)⁽²⁵⁾

ここでは、自らの言動や過ちを認めることも、慎むこ

ともない、自身の生命の意味を問うている。生きること
に対する不安は、「ある連続せる感覚」に詠まれた、不
安な心情を髣髴とさせる。また、苦しく、悲しく、寂し
く、目的もなく生きる様子は、「哀傷の夕」の、墓場の
ように静まり返った夜の街にたたずむ、哀傷にも共通し
ている。これらの詩に表れた、不安や暗く、物思いに沈
む様子は、それまでの小品と同様の陰鬱と頹廃を基調と
した、作者の心情が投影されていると考えられる。

三、「アダムの死の床」と挿絵

一九一九年夏には、詩のほかにも、「アダムの死の床」
という小品が掲載されている。⁽²⁶⁾これは、旧約聖書の「エ
デンの園」の神話に着想を得た作品で、アダムの臨終の
場面で交わされる、アダムと彼の子孫、エノクとメホア
エルの会話が中心になっている。楽園を追放され、地上
に降りたアダムとイヴ、その子孫である人間は、地上で
労苦と共に生きることを強いられている。人間が労役に
苦勞する姿を悲しむアダムに対して、彼の子孫、エノク
とメホアエルは、勞働は神聖なものだと答える。勞働を
めぐる話し合いの末、アダムは、「禍ふる哉、呪はれし

地の子等よ塵にして塵に皈るべき人の子等よ！」と言ひ残し、死の床に横たわる。この小品には、ロシア革命と当時の社会的な背景も描かれていると考えられるが、それまでの作品と大きく異なる点は、美術作品が添えられていることだ(図)。これは、森を背景にアダムとその家族を描いたもので、署名の確認ができないため、石垣栄太郎の作品だと断定はできない。しかし、石垣栄太郎は、雑誌『共存』や『紐育新報』に掲載された、小説「骸骨に接吻する女」の挿絵を手掛けていることから、これも彼の作品だと考えられる。アダムの臨終を描いた小品に対して、添えられた絵は、穏やかな構図だ。また、これは、後年の石垣栄太郎の作品に見られる、社会風俗を写實的に描く画風ではなく、むしろ、画彫会の展覧会に出品した《死の勝利》と同様、既成のテーマをもとにした習作と言えよう。

一九一九年の創作には、それまでの文芸作品の延長線上にある、頹廢的な描写を基調とした、詩や小品と、神話から着想を得た美術作品がある。しかし、創作活動に影響を及ぼした転機は、これらの作品では、明らかにされていない。

times

(日曜土) 日 九 十 月 七 年 八 正 大

アダムの死の床

石垣 埜 埜



その頃、地は紅き罪にみち、人の女子は美しかりき。アダム百三十歳に及びて、その妻イヴを知りてセツを生みし後、齡八百歳にして、男子女子を生めり。アダム九百三十歳の齡を生きたがへて、死の寢床に臥しその子等に、告げて言ひけるは、「神の怨恨は、人の子の苗裔に置かれたれば、土は咀はれ、荆棘と薊を生ずべし。汗は人の額より、限り無く流るれど、勞苦と荆棘と薊との土より食を得ざるべからず。吾が罪の毒血は永久に、人の肉に流れ、涙の河はその靈魂より靈魂に流れてつくることあるなし。女は懷妊の勞苦によりて、その麗しき肌を失ひ、「時」

苦は生存の凡てに非らざればなり。」

アダム眼を閉じ叫びけるは、

「その時、暗き露西亞の地にレニンなる者起り、ボルシユヰイキの子等を卒ひて地上に「プロレタリアートの執政」を高く呼ばむ。その時、地には白き骨、高く堆積し、血は大洋を赤く染むべし。凄き風吹きて、屍の臭地滿たん。大いなる争亂の巷、嗚呼……は禍なる哉、快樂を求むる地は禍なる哉」

エノクの孫メホアエル、アダムの耳に囁きて言ひけるは

「それ飽ける者と飢るの者との戦ひは、快樂欲と生活欲との争ひなるべし。されど和平を求むる、地の子等は、再び刃を捨てて時あどん。その後地には、美しき太陽の光り流れ。幸福の果實結ぶべし。艶麗の罪の花は紅くジュレーニアムの如く薫り。人の女子は美しく、甘き虚榮に生きた。男は性欲の園に、戀の密をさぐり。黄色なる誘惑の花粉に酔ふべし、白き柔らかな乳房の床は、彼等が眼りの爲めに設けらるべし。」

アダム再び叫びけるは
「禍ふる哉、呪はれし地の子等よ塵にして塵に皈るべき人の子等よ！アダム蛇の尻を抱きて、暗き死の寢床に眠れり。
地は紅き罪にみち、人の女子は美しかりき。」

投書欄

(図)『紐育新報』1919年7月19日、3頁。

四、小説「罪人あるなし」

ニューヨークの日本人社会は、アメリカ西海岸と比べて小規模だったことから、『紐育新報』の文芸欄も、詩や小品を中心にした小さなものだった。しかし、新年号には文芸特集が生まれ、小説も掲載されている。なかでも、一九二〇年に掲載された、石垣栄太郎の小説「罪人あるなし」は、画家の死をテーマにした特異な作品だ。⁽²⁸⁾

これは、柳瀬というニューヨーク在留の日本人が、ペンシルヴァニア州の監獄病院に画家西田の亡骸を確認しに行くというもので、主人公の柳瀬が語る、西田の物語が中心になっている。西田は、ロサンゼルスでスクールボーイをした後、芸術家を志してニューヨークに來たが、病に倒れ、狂人となる。そこで日本に帰国するために、シアトルに向った。西田の帰国を巡っては、シアトルの日本人牧師が同行することになっていたが、牧師がそれを断ったため、西田は一人でニューヨークを發ち、途中で力尽きたのだった。

「罪人あるなし」は、語り手が、友人の物語を語る二重構造になっている点と、在留邦人の頹廢的な様子を描いた点が、「滅亡の門辺に」と共通している。だが、な

ぜ日本語新聞の新年号の文芸特集に、作者と思しき芸術家の死を描いた作品を發表したのだろう。

そこで、作品が發表された時期と、石垣栄太郎の画歴と照らし合わせてみると、彼は「罪人あるなし」を發表する数ヶ月前の、一九一九年十月から十一月に、アート・ステューデント・リーグのジョン・スローンのクラスで、美術を学んだことが判明した。⁽²⁹⁾ここで石垣栄太郎は、庶民の生活や社会風俗を写實的に描いた、社会派リアリズムの画風の影響を受けたのだ。つまり、「罪人あるなし」の執筆の背景には、美術学校に通ったことと、創作上の転機があった。「罪人あるなし」には、西田は、「画の方も彼が非常に崇拜していた画家からも、前途を悲觀しているやうな口振りを聞かされていたので、それやこれやが氣狂ひになった原因なのであらう」とある。石垣栄太郎の分身と思しき西田に、悲觀的な意見を述べた画家とは、石垣栄太郎の創作に影響を与えた、美術学校の関係者だったと考えられる。さらに、作者のもう一人の分身である柳瀬は、西田は「生きていても偉い画師にもなれなかったであらう」と語っている。西田がどのような作品を制作していたのかは不明だが、彼は、創作に行き詰まっていたことが窺える。このことから、西田

は、『死の勝利』や「アダムの死の床」の挿絵を創作した、一九一〇年代の石垣栄太郎と重なることができよう。「罪人あるなし」に描かれた、画家西田の死は、世紀末芸術に傾倒した、石垣栄太郎の創作の終焉を意味しており、作者におとずれた転機を表したものだ。

この後、『紐育新報』には、石垣栄太郎の頹廢的な文芸作品は、ほとんど見られない、それに代わって、彼の社会批評や美術批評が掲載されている。

おわりに

石垣栄太郎については、これまで美術作品を中心に調査研究がされてきた。一九一〇年代の創作活動には、「思想の激変」とされる転機があったものの、これを裏づける美術資料は充分にないことから、創作活動の転機は不明だった。そこで本稿では、『紐育新報』に発表された石垣栄太郎の文芸作品から、創作の転機を探った。

一九一七年に発表された、小品「野に叫ぶ人の声を」と「滅亡の門辺に」には、カリフォルニアからニューヨークに来るきっかけになった、ガートルードとのスキャンダルや、菅野衣川との纏れた人間関係を背景にした、罪

の意識と頹廢的な、作者の心情が投影されていた。また、「滅亡の門辺に」に表れた、「滅亡の門」は、小説「髑髏に接吻する女」の「秘密の扉」にも共通する、頹廢的で墮落した世界の入口として描かれている。

そして、一九一九年の紙面に表れた、「ある連続せる感覚」「哀傷の夕」「死の誘惑」の三編の詩には、不安や悲哀、死への憧憬が表れている。これらは陰鬱と頹廢的な世界を描いた点が、それまでの小品と共通したテーマになっている。また、同時期には、旧約聖書の「エデンの園」の神話から着想を得た、小品「アダムの死の床」が、美術作品と共に発表されており、一九一九年の石垣栄太郎の作品には、それまでの小品の延長線上に位置する、頹廢と陰鬱を描いた詩や、神話から着想を得た小品と美術作品があり、多彩な芸術活動が明らかになる。

この後、一九二〇年の『紐育新報』の新年号に発表された、小説「罪人あるなし」は、作者の分身と思しき、画家の死を描いた特異な作品だった。これ以前の詩や小品にも、死を予感させる頹廢的な描写はあったが、芸術家の死をテーマにした、「罪人あるなし」は、彼の画歴とかかわりがあった。それは、この作品が発表される直前の一九一九年の秋に、石垣栄太郎はアート・ステュー

デント・リーグで、社会派リアリズムの画家に美術を学び、創作上の転機がおとずれたことだ。つまり、「罪人あるなし」に表れた、画家西田の死は、頽廃を基調とした、世紀末芸術への憧憬を抱いていた、石垣栄太郎の創作活動の一つの終焉を示していた。

石垣栄太郎は、この後、『紐育新報』に、社会批評や美術批評を発表しており、それまでの頽廃的な詩や小品は、ほとんど見られなくなる。そして美術活動では、一九二五年以降、独立美術家協会展やサロンス・オブ・アメリカに、社会の風俗を写實的に描いた作品を発表している。また、一九二一年には、日本人画家の団体である画彫会の役員にも選出されており、彼の創作活動は、文芸作品から美術作品の制作へと移っていく。『紐育新報』に発表された、石垣栄太郎の文芸作品は、これまで見過ごされてきた、彼の創作活動の軌跡をたどる重要な資料であり、ニューヨークの日本人芸術家の活動の側面を記した、移民地の文芸作品として位置づけられる。

【附記】

本稿に関する調査・研究にはColumbia University, C.V. Starr East Asian Library、Center for Research Libraries、New York Public Library、Art Students League of New York、和歌山県立近代美術館、日本近代文学館、和歌山県太地町立石垣記念館をはじめ、多くの方々に協力いただきました。末尾ながら厚くお礼申し上げます。

【注】

- (1) 東京国立近代美術館『アメリカに学んだ日本の画家たち―国吉・清水・石垣・野田とアメリカン・シーン絵画』(展覧会図録)(一九八二年)、東京国立近代美術館・京都国立近代美術館。広島県立美術館『太平洋を越えた日本の画家たち展―アメリカに学んだ18人』(展覧会図録)(一九八七年)、和歌山県立近代美術館・広島県立美術館・香川県文化会館。東京都庭園美術館『アメリカに生きた日系人画家たち―希望と苦悩の半世紀1896-1945』(終戦50年企画)(展覧会図録)(一九九五年)、日本テレビ放送網(共催・大分県立芸術会館・ひろ

しも美術館)。このほかにもTom Wolf, “The Tip of the Iceberg: Early Asian American Artists in New York” in *Asian American Art, A History 1850-1970*, eds. Gordon H. Chang, Mark Dean Johnson, Paul J. Karlstrom and Sharon Spain (Stanford: Stanford University Press, 2008), 83-109. がある。

- (2) Tom Wolf, *The Artistic Journey of YASUO KUNIOYOSHI*, (Washington, DC: Smithsonian American Art Museum, 2015), 15-86.

- (3) 和歌山県立近代美術館所蔵。和歌山県立近代美術館『アメリカの中の日本—石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録)(一九九七年) 十八頁。

- (4) 和歌山県立近代美術館所蔵。和歌山県立近代美術館『アメリカの中の日本—石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録)(一九九七年) 十九頁。

- (5) 石垣栄太郎「その夜」『新世界』一九一五年五月十六日。

- (6) 燈台守り「除夜の鐘」『日米週報』一九一六年一月三十日。

- (7) 石垣栄太郎「髑髏に接吻する女」『紐育新報』

一九一七年十二月二十九日。

- (8) 佐藤麻衣「石垣栄太郎の文芸活動—日本人画家が描いた移民地文芸」『相模国文』第44号(二〇一七年) 一七—三二頁。

- (9) 画彫会は、一九二一年五月二十五日にニューヨークで結成された、日本人画家の団体(「日本人画会画彫会と改称」『紐育新報』一九二一年五月二十八日)で、一九二二年十一月一日から二十一日まで、シヴィック・クラブで展覧会を開催している(The Japanese Artists Society of New York City, *Exhibition of Paintings and Sculptures*. (New York: The Civic Club, 1922). (和歌山県太地町立石垣記念館所蔵))。

- (10) 石垣栄太郎「玉石同架」(下) 画彫会展覧会『紐育新報』一九二二年十一月十五日。

- (11) 京都国立近代美術館所蔵。

- (12) 画家仲間の渡辺寅次郎は、本作品を「石垣栄太郎君の『鞭を持てる人』は新思想に生きんとする君にあり相な着想で濃厚にして然も波動的色彩の声と縦横無尽なるリズムとに体形された氏の作品の前に幾多の観客を棒立せしめた以所も茲にあ

- (13) 石垣栄太郎「第九回独立画展を覗いて」『日米時報』一九二五年三月十四日」と評価している。
- (14) 石垣栄太郎「アメリカ放浪四十年」(一)～(六)『中央公論』(一九五二年六月から十二月)。前掲6。
- (15) この詩について、「今見ると顔の赤くなるやうな私の詩も載っていました」と作者自身が述べている。石垣栄太郎「アメリカ放浪四十年(六)」片山潜とその同志たち」『中央公論』(一九五二年十二月)、一三五頁。『共存』(一九一七年)、日本近代文学館所蔵。また『共存』については、石垣綾子『海を渡った愛の画家 石垣栄太郎の生涯』御茶の水書房(一九八八年)、六六―六九頁。浦西和彦「前田河広一郎と『日米時報』」『国文学』83・84合併号 関西大学国文学会、(二〇〇二年一月)、三五七―三七三頁で言及されている。
- (16) 石垣栄太郎「野に叫ぶ人の声を」『紐育新報』一九一七年六月九日。
- (17) 石垣栄太郎「滅亡の門辺に」『紐育新報』一九一七年八月一日。
- (18) 前掲7。
- (19) 石垣栄太郎「エイの手紙」『紐育新報』一九一八年二月十三日。
- (20) 石垣埜埜譯「審判の庭 オスカー・ワイルド」『紐育新報』一九一八年七月十七日。
- (21) 埜埜「祈り」『紐育新報』一九一八年十月十二日。
- (22) 石垣埜埜「レデンプションと名を改へて上演された『生ける屍』プリモス座のトルストイ劇」『紐育新報』一九一八年十月二十六日。
- (23) 埜埜「ある連続せる感覚」『紐育新報』一九一九年七月三十日。
- (24) 埜埜「哀傷の夕」『紐育新報』一九一九年八月十六日。
- (25) 埜埜「死の誘惑」『紐育新報』一九一九年八月二十日。
- (26) 石垣埜埜「アダムの死の床」『紐育新報』一九一九年七月十九日。
- (27) 前掲7。
- (28) 石垣栄太郎「罪人あるなし」『紐育新報』一九一九年十二月三十一日。
- (29) Art Students League of New York, Registration record, Eitaro Ishigaki, Account No.12692,

(30)

Register No.700. Address, 246West 14th St. Art Students League of New York. これまで石垣栄太郎がアート・ステューデント・リーグで学んだ時期については、明確にされていなかったが、授業登録記録から、一九一九年十月から十一月に同校のジョン・スローンに師事したことが判明した。「日本人画会新役員」『紐育新報』一九二一年三月二十三日。「日本人画会画彫会と改称」『紐育新報』一九二一年五月二十八日。

(昭和女子大学大学院)

